

本部町 アンチの上貝塚

本部町字瀬底



26° 38' 55.76" N
127° 52' 24.78" E



用語解説

- 段丘
海岸沿いにある階段状の地形。平坦な段丘面と、急斜面の段丘崖からなり、地盤や海面の上昇・下降により生じる。
- イモガイ
サンゴ礁の海で採れる巻貝。主に、女性用の腕輪に加工されたが、遠く北海道の礼文島(れぶんとう)では、イモガイ製のペンダントが出土している。弥生～平安並行時代I～II期、沖縄で採れたイモガイやゴホウラは交易品として、九州をはじめ全国各地に広がっていったと考えられる。
- 集積遺構
貝などを1か所に集めて置いた遺構。
- 交易品
異なる地域の人々の間で交換や売買の対象とされた品物。
- 貝塚
食べた後の貝殻が、大量に積み重なった状態をいう。貝殻だけでなく、魚骨・獣骨や、日常生活に用いられた土器・石器・貝製品・骨製品なども含まれていることが多い。
- 堆積
土砂や生物の遺骸等が地面や海底の上に積み重なること。
- 弥生土器
弥生時代に焼かれた土器。焼成温度は縄文土器よりも高いため、赤色で、薄手だがしっかりしている。文様の無い土器が多く、口広の壺(つぼ)や、高坏(たかつぎ)・甕(かめ)・鉢(はち)等がある。

【参考文献】
 ・本部町教育委員会。2005。『アンチの上貝塚発掘調査報告書』。
 ・沖縄県立埋蔵文化財センター編。2009。
 『瀬底島・アンチの上貝塚：個人住宅建築に伴う緊急発掘調査報告』。
 本部町教育委員会。

1次調査区遠景



アンチの上貝塚は、瀬底島にかかる瀬底大橋のたもとにある石灰岩段丘の砂丘地に形成された、弥生～平安並行時代(約2300～900年前)の遺跡です。

2002(平成14)年から延べ6年にわたり実施された緊急発掘調査では、土器片、石器、貝製品のほか大量の貝類が出土しました。特に、県内最大規模のイモガイ集積遺構が確認され、貝が貴重な交易品として保管されていたことがわかりました。

また、石灰岩の割れ目(フィッシャー)を中心として、小規模の貝塚が多数確認されました。中には細かいサンゴ礫で覆われた特殊な状態の貝塚も見つかっています。このサンゴ礫は自然に堆積したのではなく、人が海岸で細かいものを選んで採集した後、敷き広げたと考えられます。その他、瀬底島には生息していなかったと考えられるイノシシの骨や、遠く久米島や慶良間諸島、九州本土から持ち込まれたと考えられる石材や石製品、「弥生土器」が確認されたことから、当時の交易の様子を知ることができます。

調査区近景



発掘調査風景



瀬底大橋の下にある
貝塚なんだね。



大量に出土するイモガイは、腕輪等に加工して身に付けていたのだよ。貝は食べるだけでなく、アクセサリーとして使われたのだね。



県内最大規模のイモガイ集積遺構が見つかった遺跡



主な出土遺物

本部町

ぐ し けん
具志堅
かい づ か
貝塚

本部町具志堅



26° 41' 51.47" N
127° 54' 28.09" E



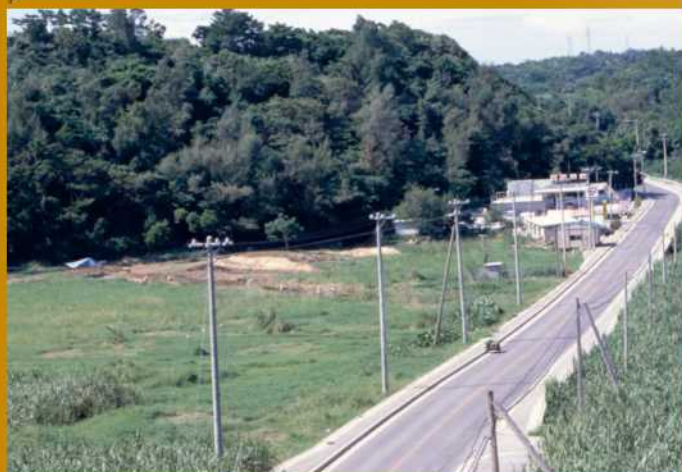
用語解説

- 複合遺跡
2つ以上の時代の遺跡が重なっている遺跡。
- 多和田眞淳
1907（明治40）年生まれ、1990（平成2）年没。教育者・植物学者であるとともに考古学者としても活躍した。
- 砂丘地
海岸の砂が吹きあげられてできた丘。
- 柱穴群
建物の柱を立てた穴が集まっている状況。
- 炉跡
火を使って調理等をした跡。住居の外にある場合もある。
- 弥生土器
弥生時代に焼かれた土器。焼成温度は縄文土器よりも高いため、赤色で、薄手だがしっかりしている。文様の無い土器が多く、口広の壺（つぼ）や、高坏（たかつき）・甕（かめ）・鉢（はち）等がある。
- 埋葬
死体または遺骨を土中に葬ること。

- 副葬品
遺体を葬る際にそえられた物。

- 葬制
亡くなった人に対する弔いのための一連の行為や儀式。

遺跡遠景



具志堅貝塚は縄文時代後期（約3500～2500年前）、弥生～平安並行時代Ⅰ・Ⅱ期（約2300～2000年前）の複合遺跡で、1954（昭和29）年に多和田眞淳氏により発見されました。遺跡は本部半島の北海岸に形成された、標高約3～4mの砂丘地に立地しています。

1983～1984（昭和58～59）年に発掘調査が行われ、弥生～平安並行時代Ⅰ・Ⅱ期の柱穴群や炉跡、貝集積等の遺構とともに、数多くの土器や石器、貝製品、骨製品、貝殻、魚、ウミガメ、ジュゴン、イノシシなどの骨が出土しています。中でも九州からもたらされたと思われる「弥生土器」は、当時の人々の海を越えた交流を示すものとして重要です。

また、最下層から見つかった埋葬人骨は、副葬品として「大山式土器」が伴っているため、縄文時代後期のものと考えられます。当時の葬制を知る上で貴重な資料です。

【参考文献】
・本部町教育委員会。1986。『具志堅貝塚 発掘調査報告』。
・多和田眞淳。1956。「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」。In: 琉球政府文化財保護委員会（編）『文化財要覧』。

- 大山式土器
宜野湾市の大山貝塚から出土した土器に代表される形式の土器。深鉢形が多く平底。縄文時代後期の土器で、沖縄島及び周辺離島に分布。

●発掘調査風景



食料採集や九州の人々との交流など海とのかかわりが深い遺跡



●埋葬人骨（縄文時代）



●イモガイ集積（弥生～平安並行時代）



泳ぎが得意
だったのかな。

たくさん出土する遺物から、
当時の暮らしを
想像することができるね。



●弥生土器出土状況（弥生～平安並行時代）

名護市

うふどうばる
大堂原
かいづか
貝塚

名護市字済井出



26° 40' 41.05" N
128° 0' 44.26" E

用語解説

●土器型式

特定の時期と地域から出土する共通した特徴を持つ土器の類型のこと。「○○式土器」のように使う。「○○」には、通常その土器が最初に見つかった遺跡の名前が入る。

●石斧

石製の刃を付けた斧。木製の柄に取り付けて使用する。

●埋葬

死体または遺骨を土中に葬ること。

●ゴホウラ

インド洋・太平洋のサンゴ礁の海で採れる大きな巻貝。主に、男性用の腕輪に加工された。交易品としての流通はイモガイの項を参照。

●交易品

異なる地域の人々の間で交換や売買の対象とされた品物。

●弥生土器

弥生時代に焼かれた土器。焼成温度は縄文土器よりも高いため、赤色で、薄手だがしっかりしている。文様の無い土器が多く、口広の壺(つぼ)や、高坏(たかつぎ)・甕(かめ)・鉢(はち)等がある。

【参考文献】

・名護市教育委員会。2005。『大堂原貝塚：古宇利屋我地線建設に伴う緊急発掘調査報告書』。

●発掘調査風景



●遠景 (2018年撮影)



大堂原貝塚は、屋我地島の北海岸、字済井出にある遺跡で、古宇利大橋のたもとに位置しています。1998～2004(平成10～16)年まで、古宇利大橋建設に伴う緊急発掘調査が行われ、縄文時代早期(約6500年前)から弥生～平安並行時代Ⅱ期(約2000年前)までの遺物や遺構が見つかりました。沖縄諸島で出土する土器のうち20近い型式が確認でき、沖縄の考古学を学ぶ上で貴重な資料となっています。土器の他にも、石斧等の石器や、腕輪・指輪等の貝製品、イノシシやクジラの骨を利用した骨製品も出土しました。人骨も数体分出土しており、一番古いものでは縄文時代前期(約5500年前)の埋葬人骨が見つっています。発見当時、県内最古の埋葬人骨として注目されました。

また、弥生～平安並行時代Ⅰ・Ⅱ期(約2300～2000年前)の遺構として、腕輪の原料となるイモガイやゴホウラの集積が十数基見つかりました。これらの貝は九州地方との交易品のひとつであり、その見返りとして手に入れたと考えられる九州地方の「弥生土器」も出土しています。



わあー、きれいな海。
昔の人たちも、この
きれいな海から貝や魚を
採って生活して
いたんだろうね。



イモガイやゴホウラは
九州で加工され腕輪とな
り、支配者階層の人々に
身につけていたのだよ。南
の海から採れた巻貝には、
強い力が宿っていると考え
ていたのだから。



約20種類の多様な土器が出土した貝塚



縄文前期人骨（成人男性下肢）



イモガイ集積遺構



縄文早期遺物（土器・石器・貝製品・骨製品）



縄文中期～後期遺物（土器）

あ わ よ な が わ ば る
安和与那川原
い せ き
遺跡

名護市

名護市字安和



26° 36' 48.07" N
127° 55' 38.88" E

用語解説

●嘉徳Ⅰ式土器

奄美大島瀬戸内町嘉徳遺跡で最初に出土した土器。約4000年前の土器である。小型のものが多く煮炊き用としては不向き。

●石蒸し料理

多数の焼いた石の上にバナナ等の大きな葉で包んだ食材をのせて蒸す調理法。

遺跡遠景



安和与那川原遺跡は、安和集落の西側を流れる与那川の河口から約400m内陸に位置する砂丘上にあります。標高は約3.5mで、遺跡の背後には嘉津宇岳があります。

当初は、安和集落に広がる安和貝塚の一部と考えられていましたが、2006（平成18）年度に行われた安和与那川砂防事業（土砂崩れによる被害を防ぐための工事）に伴う試掘調査の結果、安和貝塚よりも古い時代の土器（嘉徳Ⅰ式土器等）が出土したため、別の遺跡であることが判りました。その後、2014（平成26）年から2018（平成30）年にかけて工事前の緊急発掘調査が行われ、縄文時代後期～晩期（約3500～2500年前）及びグスク時代（約900～400年前）の遺物や遺構が見つかりました。縄文時代後期～晩期にかけての層からは石蒸し料理の調理場跡と思われる集石炉跡が44基検出されました。

その他、縄文時代晩期の層からは、ほぼ完全な状態でイヌの全身骨が2頭分出土しています。

【参考文献】

- ・名護市教育委員会. 2017. 『安和与那川原遺跡: 安和与那川砂防事業に伴う安和与那川原遺跡緊急発掘調査』.
- ・名護市教育委員会文化課文化財係. 2018. 『名護・屋部地区の埋蔵文化財ハンドブック』.

1100	1200	1300	1400	1500	1600
グスク時代			三山	第一尚氏	第二尚氏(前期)
新里村期			中森期		

● 集石遺構



海と山、川に囲まれた場所で営まれた豊かな暮らし



● イヌ骨検出状況



● 貝製品

縄文時代の調理場だって。どんな料理をしていたんだらうね。



● 伊波式土器



食材を植物の葉にくるんで、焼いた石を周りに置くと食材が蒸し焼きになるのだよ。また、イヌの骨が出土しているのでペットとして飼っていたのかもしれないね。

ナングスク

いせきぐん
(ナングシク遺跡群)

名護市字名護



26° 35' 19.87" N
127° 59' 33.45" E

用語解説

●李氏朝鮮

朝鮮最後の統一王朝(1392~1910年)。太祖李成桂が高麗を倒して建国、漢城(現在のソウル)を首都とした。儒教を国教化し、領土を朝鮮半島全域に広げると、15世紀に最盛期を迎えたが、その後、党派の争いが激化し、豊臣秀吉の軍や清軍の侵入をこうむり社会は混乱した。19世紀には日本や欧米列強の圧力を受け、1910年、日本に併合された。

●『海東諸国記』

1471年に、申叔舟が朝鮮王の命令を受けて著した書。海東諸国というのは、日本本国・九州・寺崎対馬・琉球国のこと。これらの国の地理や歴史などを解説している。この書に付けられた「琉球国之図」は1453年に作成されたもので、琉球最古の地図である。

●グスク土器

グスク時代に沖縄で作られた土器。鉢・鍋・壺を主体とした底部が広い土器で、カムイヤキや滑石製石鍋を模して作ったと考えられる。

●カムイヤキ

奄美諸島に属する徳之島伊仙町の山中に分布するカムイヤキ古窯跡群で、11~13世紀に生産された無釉の焼締陶器。鹿児島県の薩摩半島から琉球列島全域に分布する。

●青磁

釉薬が緑か青色系の色調となる磁器。古くから中国をはじめ、朝鮮、日本、ベトナム、タイ、ミャンマーなどで生産されている。日本や沖縄で出土する中国産青磁の多くは、元から明代にかけて浙江省の龍泉窯及びその周辺で生産されたもの。

●青花

中国産の染付(白地に青色の模様がある磁器)。

●柵

木杭を並べ立ててつくった小規模の防壁。砦(とりで)。

●防御施設

敵の攻撃などを防ぎ守るための構造物。

● 炉跡・柱穴検出状況



● 遠景 (2018年撮影)



ナングスクは、李氏朝鮮で書かれた『海東諸国記』という書物の「琉球国之図」に「那五城」として登場するグスクで、名護市街地東側の丘陵地にあります。「土のグスク」と呼ばれるように、石垣を築いて造られる一般的なグスクとは違い、斜面を削って切り立つ壁とすることで城壁の代わりにしたり、掘切(大きな空堀)を造ったりしていることから、日本本土にある中世山城の建築技術の影響を受けていると言われてしています。

これまでの調査で、グスク土器やカムイヤキ、中国製の青磁や青花等が見つかっており、13世紀後半頃には人が住み始めたようです。本格的な調査がまだ行われていないため、詳しいことはわかっていませんが、地下にはグスク時代の柵等の防壁の跡や、その周辺につくられた集落跡等が分布している可能性があります。

掘切



毎年桜祭りに来てたけど、600年以上前にできたグスクだったことは知らなかったな。



このグスクは、14世紀はじめ、名護の地を治めていた名護按司が住んでいたところだと伝わっているのだよ。地域ではグスク内の広場を「グスク原」掘切の場所を「ポッキリ」と呼んでいるのだよ。



中世山城の影響を受けた石積みの無い土の城



出土遺物

【参考文献】

- ・名護市教育委員会文化課文化財係. 2010. 『名護市のグスクハンドブック』.
- ・名護市教育委員会文化課文化財係. 2013. 『名護市の埋蔵文化財ハンドブック』.



拝殿



アサギでの村踊り

宜野座村

めーばるいせき
前原遺跡

宜野座村字松田



26° 28' 54.75" N
127° 59' 32.71" E



貝塚時代の生活(紙芝居「グスク時代の宜野座村」より)

今は県道(234号)になっているけど、約3,800年前の人たちの生活の場だったんだね。



この遺跡は、人が住んでいた場所ではなく、ドングリの野焼やアブ抜きをした場所と考えられているんだ。ドングリは竹で作ったカゴ(バーキ)に入っていたよ。また、この遺跡からは使わなくなったクリ杓を利用した水場や石斧で切られた木の破片なども出ているので、どのように貝塚時代の人々が植物を利用したのかわかる遺跡なんだよ。

惣慶のオキナワウラジロガシ



遺跡からは、過去の人々が食料とした動物や魚の骨や貝殻、それらを調理するための土器等が出土しますが、木の実等の植物性遺物は何百~何千年という時の中で朽ちてしまうため、ほとんどの場合、現代まで残ることはありません。しかし、常に水が湧き出すことで「じめじめ」している低湿地に埋まった木の実等は、空気に触れない状態にあるため、腐食が進まずに残っていることがあります。

宜野座福地川の河口北側にある前原遺跡の発掘調査では、オキナワウラジロガシの実(ドングリ)が竹で編まれたバーキ(カゴまたはザル)に入った状態で見つかりました。バーキの年代を測定したところ、約3800年前という値が出たため、当時の人々が竹を細く割ってバーキを編む技術を持ち、オキナワウラジロガシの実を食糧としていたことがわかりました。

オキナワウラジロガシの実は、渋くてそのままでは食べる事ができません。前原遺跡の人々は渋味を抜く目的で砂地に穴を掘り、湧水に浸して貯蔵していたのではないかと考えられています。

● 貯蔵穴 (オキナワウラジロガシ)



約3800年前のウチナンチュ（沖縄人）の
植物利用や食生活が見えてくる遺跡



● バーキ (竹籠)



● 遺跡遠景

【参考文献】

- ・宜野座村教育委員会. 1999.
『前原遺跡：県道漢那松田線道路整備工事に伴う発掘調査報告書』.
- ・田里一寿. 2014. 『貝塚時代におけるオキナワウラジロガシ果実の利用について』. In
:高宮広土・新里貴之(編) 『琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷に関する
実証的研究 研究論文集 第2集』. 六一書房.

宜野座村

ぎのざぬ
宜野座又
ふるじまいせき
古島遺跡

宜野座村字宜野座



26° 29' 5.85" N
127° 58' 39.91" E

用語解説

- ノロ
地域の神事を執り行った女性。王府から辞令書を受けたものを公儀ノロという。
- 火の神
台所に祀られている家の神で、家族の安全や豊作などを祈った。3つの石を御神体とするのでワミチムン(御三物)とも呼ばれる。
- ヌル殿内
ノロ火の神がある家。
- 根屋
村に最初に移り住んだ人の家で、村落の祭祀の中心となる家。根所(ニードゥクル)とも呼ぶ。
- 神アシャギ
神を招いて祭祀を行う場所や建物。
- 『琉球国高究帳』
近世の琉球における各村の米の生産高を田畑別に示し、間切(いくつかの村で構成される沖縄独自の行政区画単位)ごとに集計したもの。
- 風水
土地の良し悪しを判定する考え方。古代中国で発生した。
- 仲原式土器
うるま市伊計島の仲原遺跡で最初に出土した縄文時代晩期の土器。深鉢形と壺形があり、底部は尖底。文様は無く、外耳を付けるものもある。
- 貿易陶磁器
海外貿易によって得られた陶磁器のこと。グスクの発掘調査で発見される貿易陶磁器は主に中国産であるが、他に朝鮮・ベトナム・タイ・日本産がある。輸入陶磁器ともいう。

大川グスクのイメージ(紙芝居『グスク時代の宜野座村』より)



沖縄島北部にある宜野座又古島遺跡は、大川グスク跡とも呼ばれ、周辺にはノロ火の神を祀る「ヌル殿内(ヌドゥルチ)」、「大川按司の屋敷跡」、「根屋跡」、「獅子安置小屋」、「神アシャギ」等旧家の屋敷跡や祭祀施設が集中しています。

17世紀中頃、首里王府によって書かれた『琉球国高究帳』には、「ぎのざ村(ムラ)」として初めて登場します。しかし、集落が宜野座福地川の浸食によって形成された石灰岩台地にある事が風水的見地から「ムラの脇腹が川の流れによって突かれているような地形」と判じられたため、集落は1840(天保11)年に南へ300mほど移動しました。そのため元のムラだった場所は「古島」と呼ばれるようになりました。

国道329号の改良に伴う発掘調査では、約3000年前の縄文時代晩期の地層から「宇佐浜式土器」や「仲原式土器」、並べられた状態の複数の石斧、約1200年前の奈良～平安時代相当期の地層から「くびれ平底土器」や柱痕が見つかりました。また、約490年前のグスク時代の層からは質

- 集石遺構
大小多くの石が意図的に集められた跡。
- 石畳道
平らな面を上にして石を敷き詰めた道。
- 喜念1式土器
徳之島伊仙町喜念貝塚で最初に出土した縄文時代晩期の土器。頸部がしまり、胴部が張る甕形の土器で底部は丸底と推測されている。屋久島から沖縄島北部まで分布する。
- 黒曜石
火山岩の一種で沖縄では産出しない。ガラスとよく似た性質を持ち、割ると鋭い断面を作る。世界各地でナイフや矢じりなどの石器として使われた。日本では九州以北の地域で産出する。

800	900	1000	1100	1200	1300	1400	1500	1600
グスク時代					三山	第一尚氏	第二尚氏(前期)	第二尚氏(後期)
新里村期				中森期				

石畳道



ここがぎのぎムラの中心だったなんて信じられないね。どれだけの人が暮らしていたのかな。



この遺跡は大川グシク跡とも呼ばれていて、宜野座村で石積みのあるグスクは、ここだけなんだよ。沖縄の外から持ち込まれた土器や黒曜石などが出土するので遠くの人達とも交流していた事がわかるのだよ。



縄文時代から近世までの長きにわたり利用された土地



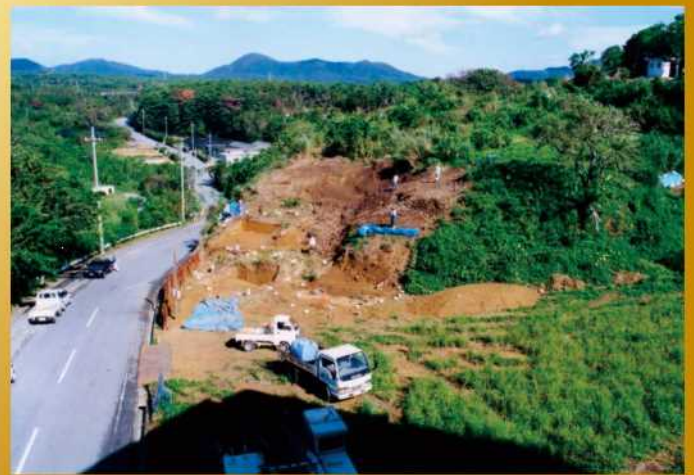
青磁出土状況



並べられた石器

易陶磁器や牛の骨が混ざる集石遺構、約330年前の琉球国時代の層からは石畳道や外国産・本土産の陶磁器、沖縄産の陶器等が確認されました。その他、奄美諸島で確認される「喜念I式土器」、鹿児島県日東産の黒曜石、徳之島産のカムイヤキ、中国の古銭等、沖縄の外から持ち込まれた様々な遺物も出土しています。

宜野座又古島遺跡は、この地域に暮らした人々の生活の移り変わりや他の地域との交流を考える上で重要な遺跡です。



遺跡遠景

【参考文献】

- ・宜野座村教育委員会. 2010. 『宜野座又古島遺跡：一般国道329号宜野座改良（1工区）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』.
- ・宜野座村教育委員会. 2012. 『宜野座村内文化財分布調査報告書（平成20～23年度）』.